

身体の惰性をひき止める力

津守 真

一、

前号に、私は「一日の保育を終えて、何と多くのことをしたかと思う。しかし振り返ってみると、何をしたのか、いろいろ思い出せない」と記した。朝、保育がはじまる前に、子どもと出会い交わる覚悟を新たにしても、子どもの顔を見ると、その日その時のやりとりの中に巻きこまれ、次から次へと起こることに追われて忽ちのうちに一日は過ぎる。そして保育が終わってすぐには何も思い出せない。ただ身体の中のほてりと疲労が、何か大切なことをしていたことを証してくれる。

ひとつひとつの場面では、思い切って子どもの側に身をおいて応答することに自らのエネルギーを費やしているのに、あとになってそれらを思い出すことができないのは何故なのだろうか。

それは保育が肉体を使う仕事であることに大きな理由があると思う。言語によって示される理念は、保育者の肉体を通らなければ、子どもとの間で実現されない。理念が肉体に化する時には、ひとつずつの行為は、最初の意識によってコントロールされるのではない。身体は、その底に沈澱している慣習化された自動的思考様式を含む生活全体の無意識によって左右されることが多い。身体を動かす作業においては、心身ともに疲労せず済ませようとする保守的、保身的、衝動的な人間の傾向が優先しやすい。その情性を途中で引き止めて、初心の原点を思い起こさせる力を必要としている。

私がいろいろのところで強調してきた「表現と理解」の保育実践における役割はここにあると思う。ひとつひとつの具体的場面で、子どもの行動を、慣習的な大人の目で見ることを意志的に止めて、子ども自身の表現として見ることに転換する作業である。保育の実践は、たえず新たな具体的場面の連続であり、このことが意識的課題となるときに、保育の場は子どもが主体として生活する場となるであろう。

二、

晩秋のあたたかい日、庭の隅のシーソーにT子が両足をかけて立って揺らしていた。だれもそばにいなかったのです、私は近寄って手を出すと私の手につかまった。シーソーのわきに古タイヤが十数本立ててあった。T子はその上へのぼり、不安定に足をかけてぐらぐらと揺らした。私はT子はこのように心も生活も不安定なのだろうと考えた。

若い実習生のAさんが来た。最近T子と親しくしている人である。Aさんは、T子はわざと不安定にしている、自分が落ちてもいいと思っっているのではないかと言った。私はT子が幼稚園の時に担任をしていたことがあり、その経験では、T子は大人に支えてもらいたいので高い所に上ると考えていたことを話した。話しながら、ただ支えられたいために高い所に上るといふ定形的解釈ではない、Aさんの見方に軽いショックを覚えた。それはいまT子の心に起こっていることを言いあてているように思った。長年この子どもを見ていると、大人は次第にこういうことに慣れてしまつて、傍にいて支えさえすればいいと思うようになるのがこわい。私はAさんに、あなたの見方は新鮮で良いと言つと、Aさんは、毎週火曜日に一回だけの実習生がくるが、その一回に賭けてくる実習生の新鮮な見方が知りたくて、保育の後のミーティングにはかならず参加しているのだと言ふ。

T子の父親は半年程前に死に、母親も最近勤めに出なければならなくなった。すべてが否応なしにそのように変化した時、T子は一時よりも元氣を取り戻したように見えた。T子は予感していたどん底の状況に立ち至り、そのどん底の現実、不安をもつて見ていた時よりも優しいものだったことを、担任の先生たちの親しい配慮を通して発見しつづめるのではないか、そのような希望がもてるように接するのが現在の保育者の課題なのではないか、こんなことをAさんと話し合った。

私共が話している脇で、R男が担任のC先生と高い所に渡した丸太の上にいた。今朝来

た時から大声で泣き叫んでいる声が学校中に響いていた。そのR男をC先生が肩の上に乗せて過ごしていた。登校の途中で何かあったらしい。詳しいことは分からないが、自分ばことばを話さなくても立派に一人前の人間であるとの確信が、この子の心の中で揺らいだことがあったのではないかと私は察した。

R男は丸太の上を渡るのだが、ときどき手を放すので、そのたびに私共はひやひやする。私が傍にゆくと笑顔をみせて、丸太の上からかかんで私の頬にキスしてくれる。C先生や私につかまって丸太を下りたり上ったりする。私は、こうして三人で対等に穏やかにいられる時を大切にしようと思った。そしてかなりの時間をこうして過ごした。R男はもう泣いておらず、明るい顔でやりとりしていた。

保育のあと、お茶をのんで休むうちに思い起こしたささやかな保育のひとつまである。

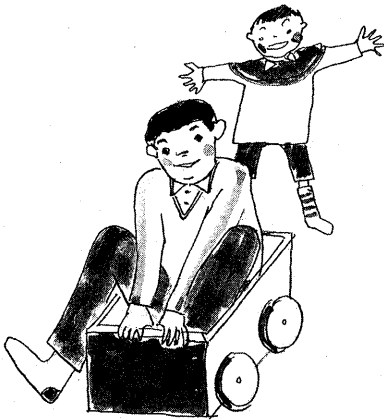
三、

次々に展開する子どもの行動を「表現」として意識し直した時、無意識の惰性をくい止めて、子どもの求めにこたえることができる。すなわち、保育者の初心の原点である。子どもが主体として生きる場を、実践的に具体的に展開することができる。

私はこのことを「子どもの権利条約」に結びつけて考えている。子どもが主体として生きるという保育哲学、教育哲学は、長年にわたって国内外の先輩たちによって築かれてきたが、二十世紀末の現在に至って、これが個人の思想の域をこえて、「子どもの権利条

約」として国際的合意となった。このことの意義は大きい。保育者は一方においてその哲学を深める課題と共に、他方において、現代という世界規模の時代に、子どもを社会の担い手として認識するこの横のひろがりをつくる課題を負っている。この後者の点については、時をあらためて更に考えつづけたい。

氾濫する情報に迷わされずに、世界中の保育者と共に、この原点をよりどころとして、子どもが主体となって生きられる場を日々身のまわりに作ってゆくことが、実践における共通の課題である。



(愛育養護学校)